制作と生成の基層をなすもの

―一九三〇年から一九四四年に至る河井寛次郎の模索―

浪波利奈

浪波　利奈

要旨

一九三〇年代に入ると、陶藝家の河井寛次郎（一八九〇年～一九六六年）の制作と思索とは活潑な相互作用を繰り返すようになった。彼は〈制作における自然〉――主体的制作と自然の生成作用との相即する境地――が如何にして可能かを模索し続けた。この模索を通じて、〈制作〉と〈自然〉を根柢において支える〈制作と生成の基層をなすもの〉に彼は思い到った。本論文では、一九三〇年代から一九四〇年代半ばに至る、この〈一なるもの〉をめぐる河井の制作論的模索を、実際の制作活動とも関連づけながら考察する。

手仕事を担う職人は、その制作を下支えするはたらきを身体の内に宿している。河井はこれを「からだ」と称した。「からだ」とは、はたらきつつある生産的な「全体（whole）」であり、畢竟、制作をして「其処から」派生せしめる〈直観〉である。かかる直観の下で作られたものには、しかしながら、おのずと個差が生まれる。何となればその出口は、個々人の「身体」を措いて外にはあり得ないのだから。時間や空間などの懸隔を超えて制作者を包越する〈一なるもの〉が「からだ」であり、それは物理的実体としての「身体」とは異なる。

制作を司るという意味で、「からだ」は制作全般の一つの規矩となる。制作者は素材の内なる〈形なき形〉を直観し、それを〈あるべき形〉へと表現してゆく。「からだ」によって、制作自体の〈然るべき姿〉を直観するということである。〈制作における自然〉へは直観なくして到り得ず、その直観が個から全体へ、すなわち個人から〈制作と生成の基層をなすもの〉へと通じていなければ、〈なすこと〉と〈なること〉のあわいをなすこの包越者は、個を通じて発現しない。河井にとって制作は、個性を衒った制作とは真逆のベクトルを有する。一九三〇年代に多く見られる河井の模倣的習作は、過去の制作物を通じて、古人の制作態度に思いを致し、自身の制作の〈然るべき姿〉を模索するための試行錯誤であった。

集落を含めた「自然環境」、その中に具体化されている無為の生成作用と、その自然をトポスとしてそこで営まれる「暮らし」を典型とした人間の制作作用とは、等根源的である。そのことを河井は集落の景観や雑器の美を通じて考察している。「自然環境」と「暮らし」の相互作用の函数が集落であり、そこに実用雑器が生まれる。「からだ」をはたらかせて「自然環境」に即した「暮らし」を営むことは、制作と生成を包越するものに深く抱かれて生きはたらくことを意味する。人々の営みはみな、〈制作と生成の基層

をなすもの〉に由来し、そこへと通ずるのである。

河井は古今東西さまざまな制作物に共通の指向性を見出した。その指向性の先に、〈制作における自然〉がある。古今東西に共通するこうしたありかたから翻ってみると、〈形が成ること〉を統べる〈一なるもの〉の作用が見えてくる。河井がこのような視座を得るに至ったのは、江戸時代中期の思想家、富永仲基の歴史観を特徴づける「加上」の原理を知ったからである。

地域文化の外形的特殊性や個性を包越しながら、それぞれの個において〈あるべき形〉を生み出す一なる形成力、これこそが河井の見据えていたものである。この点からして、一九三〇年代後半の文化統制という潮流に顕著な〈文化的特殊性の均一化〉は、河井の意に染まなかった。地域文化の多様性の捨象は、〈一なるもの〉の自己形成作用の阻害に外ならないからである。